The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ボーダーレス時代を考える : デザインの境界と領域
Author(s)	中根, 清
Citation	デザイン理論. 1990, 29, p. 103-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52703
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第119回　例会発表要旨

ボーダーレス時代を考える
―― デザインの境界と領域 ――

中根　　清

デザインの境界と領域

デザインは「生あるもののため」にあり，その活動はモノやシステムを創り上げていくプロセスにおいて，計画から最終段階に至るまであらゆる職能が関わって行なう行為である。従ってデザインに境界はないといえる。

現代における国際・政治・学問・企業および個人について考えてみると，それぞれには領域があり，お互いにそれを弁えながら境界を取り除いて拡大してゆく傾向にある。

デザイン界にも境界はないが領域らしきものはあるというのが，私の主張するところである。

ボーダーレス時代のデザイン

最近，コンピューター関係で人間の知能に近い判断で問題処理をしようという，曖昧性を意味し揺らぎの理論ともいわれているファジーという言葉をよく聞く。そもそも曖昧とは，物事を固定せずに如何なる変化にも適応できる柔軟性を意味するものといえる。

現代の高度情報化社会において，我々の周辺には曖昧さを含む多種多様の情報が満ち溢れている。その中から必要な情報を取捨選択して整理し吸収する能力が要求されている。

デザインの分野は，この曖昧性と揺らぎの中で解決しなければならない問題を取り扱っているといえる。これからは，お互いが対立しつつも調和を図ることによって揺らぎを発展させ，境界を打ち破ってデザインの領域を拡大してゆかねばならないと思っている。

キーワードとして
「不易流行」

進歩のためには，古来の伝統やそれぞれの流派をお互いに認めあった上で，それにこだわりをみせて留まるだけではなく，乗り越える必要があると思う。今まさに「不易」と「流行」との融合が望まれる時ではなかろうか。

「自然とテクノロジー」

デザインをする場合，自然を尊重し自然との融合を図ることを第一義とすべきで，自然と相反するデザインはあり得ない。自然は完璧であるという概念のもとに，人間が創るものはできる限り自然に近づける努力をしなければ，それは単にテクノロジーを駆使した人工物に過ぎない。自然を尊重し人為的なものを自然のテリトリーと同格にする努力を怠ってはならない。

自然破壊や環境汚染がクローズアップされてきている昨今，デザイナーとして何ができのかを考える時，自分の領域内だけで行動していたのでは何もできないのではないか，また今までに自然を意識してデザインをしていたかどうか，反省する必要があろう。

「ニッチ」

人の能力や物の価値に相応しい地位とか場所のことで，納まるところに納まった状態をいい，生物の分野では住み分けの意味に使っている。彼らはお互いに自分たちのニッチを持っていて，自然との共生関係をうまく保っている。

人間社会は運命共同体である。お互いが自分に相応しい居場所を弁えてそれぞれの境界と領域を認識し，そのうえで交流し合流することによって新しいニッチを創りだし，さらに融合に結び付けて次世代への創造活動を行なう時がきたといえる。

「レトロフューチャー感覚」

過去と未来は時間軸でいえば 180 度の方向で全くの正反対であり直線上のものである。しかし，同一時間帯に存在するハイブリッド即ち異種混合として考えれば，そこに新しいジャンルが生まれるのではないだろうか。例えば京都の四条にある「ネクサス・ビル」は，玄関のデザインは昔のままの姿であるが，一歩中に入ると全く新しい感覚の空間が出現される。これは時代経過をデザインによってうまく処理したハイブリッド手法の典型的なものといえる。

まとめと提唱

以上「ファジー集合論」「不易流行」「自然とテクノロジー」「ニッチ」「レトロフューチャー感覚」と，脈絡のないことを申し上げたが，要点として，今後のデザイン活動には自然の根源をしっかりと弁えた上で，それに囚われない融

通性と時代の変化に応じて変幻自在に反応する感性を養うことが肝要であろうということをいいたかったのである。

デザイナーは「自然と人工」「ハイテクとヒューマンタッチ」「オールドとニュー」など一見矛盾するものに対するインターフェイス的役割を果たさねばならない。そのためには揺らぎの理論を活用し，自然科学を始め人文科学，民族学，文学，医学，生物学，理学，工学など，あらゆるジャンルの方々の協力を得て，世紀末現象とも見えるある種のカオス的な現状から，新しいコスモスの新世紀を迎えるために活動の場を求める必要がある。私はそれを“デザインの新しいルネサンス運動”と名付けて提唱し，ハイブリッド的に推進したいと思っている。

(平成元年5月20日　京都教育大学)